The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	楽園と蛮人のゆくえ : もうひとつの「パラダイムのパラダイム」
Author(s)	正木, 恒夫
Citation	大阪外大英米研究. 1990, 17, p. 15-29
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/99138
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

楽園と蛮人のゆくえ
―もうひとつの「パラダイスのパラダイム」

正　木　恒　夫

1

「パラダイスのパラダイム」というのは、川崎寿彦氏の名著『楽園と庭』(中央公論社、1984) の第一章につけられた表題である。「イギリス市民社会の成立」という副題をもつこの著書の中で、川崎氏は、イギリス近世の庭園史ないし庭園の文学史を、楽園願望というパラダイムを用いて読み解きながら、そこに濃密な政治的記号空間を発見し、やがて大規模な海外進出に向かうエネルギーが、ほかならぬ庭の記号学の中にかくされていることを見事に示している。とかく退嬰的な日本の英文学研究において、まれにみる成果と言ってよかろう。

もっとも川崎氏のこの名著にも、私なりの不満がないわけではない。第一に、川崎氏のパラダイムには、「洋上の楽園」に住まう先住民の姿がない。第二に、ルソーの庭園観を語りながら、ルソーが称揚してやまなかった『ロビンソン・クルーソー』の「楽園」にふれていない。[1] しかしこれはむしろ欠点というより、ないものねだりと言うべきだろう。川崎氏の論ずる洋上の楽園が、バーミューダ島という無人島であり、また『ロビンソン』を扱えば、「市民社会の成立」という枠組みをはみだすことにもなりかねないからだ。そこで私は、川崎氏とは異なるパラダイムを使って、川崎氏が語り残した時代における、洋上の楽園の系譜をたどってみようと思う。私が用いるパラダイムは「楽園と蛮人」、扱う時代は18世紀から現代まで、そしてとりあげる作品は次の五つである。[2]

1）　ダニエル・デフォー『ロビンソン・クルーソー』(1719)

2）　J. R. ヴィス『スイスのロビンソン一家』(1812-13、英訳1814)

3）　R. M. バランタイン『さんご島』(1858)

4）　サマセット・モーム『月と六ペンス』(1919)

5）　ウィリアム・ゴールディング『蠅の王』(1952)

およそ二世紀半の広がりをもって、ヨーロッパ文学史に点在するこれら五つの小説から、われわれはひとつの共通したモチーフをとりだすことができる。それは「楽園と蛮人」なかんずく「洋上の楽園と、それを脅かす蛮人の姿」である。より正確には、「ヨーロッパ人が非ヨーロッパ地域に発見または建設した楽園と、その周辺に住み、しばしば食人種とみなされた非ヨーロッパ人の脅威」ということになろう。ただしこの定義を完全にみたすのは、『ロビンソン』と『さんご島』だけで、他の作品は、あるいは微妙にあるいは大きく、この定義からずれている。『ロビンソン』と『さんご島』の間にも、実は無視できない変化のあることが、読み較べてみるとすぐに分かる。そうしたずれや変化は、どのように、又なぜ生じたのか、そしてこの変遷の末に「楽園と蛮人」というモチーフは、いったいどこに行きついたのか、ヨーロッパ人が描く非ヨーロッパ像に、はたして変化はあったのだろうか。これが私の問題意識であり、表題の「ゆくえ」の意味もそこにある。

2

『楽園と庭』の延長線上で言えば、ロビンソンは、庭という楽園を出て荒野に降り立ったイギリス人のひとりである。それは具体的には、海に囲われた楽園イギリスを後に、大西洋をこえて新大陸に渡った人々であり、その多くは『ロビンソン』の作者デフォーと同じく、戦闘的なピューリタンであった。彼らが降り立った新大陸が荒野であったか、それとも楽園であったのか、時代により場所によって彼らが残した証言には信じがたいほどの矛盾があって、単一の像を結ばせることがむずかしい。ヨーロッパが描いた新世界像は、コロンブスによる「発見」の瞬間から楽園と荒野・豊饒と不毛・友好と敵対

という二項対立を、宿命的にはらんでいたのである。南米大陸オリノコ河口に浮かぶロビンソンの島も、例外ではなかった。

漂着後いかだを組み、難破船から運べる限りの荷物を運び終えたロビンソンは、次に宿営地をきめるため、丘の頂に登って島を展望する。そこで確認できたのは、四方を海に囲まれ陸影を見ないことのほかに、島が不毛の（barren）地であることだった。なるほど鳥は無数にいた。しかしロビンソンには、そのうちのどれが食用に適するものかが分からなかったし、試しに撃ち落としてみた大型の一羽はタカに似た鳥で、とても食べられたものではなかった（71-2）。島はこのように、まず不毛の相をもってロビンソンの前に姿を現す。漂着当夜ロビンソンが口にしたのは、幸い見つかった清水と、持っていた葉煙草のみであった。以後およそ10週間の間に島がさしだしてくれたのは、野生化したヤギや野バト・ウミガメの肉だけで、それ以外には難破船から運んだ食料で食いつないでいくほかなかった。こうした島の厳しい自然条件は、主人公を将来の危険と欠乏にそなえる徹底した計画性とたゆみない労働に向かわせたのである。例えばロビンソンは、洞穴を利用した城塞の完成をいそぐ一方、この段階ですでに、弾薬不足にそなえてヤギの家畜化を試みているし（92）、船から偶然運ばれて芽生えた大麦も、食用に供するまでに4年もかける慎重さだった（95）。この計画性と労働こそ、ロビンソンの基本的な生活様式であって、やがて島が楽園の相を現しはじめたからといって、それがゆらぐことはなかったのである。

漂着後10カ月以上もたったある日、ロビンソンは「島のいっそう精密な調査」（112）に出かける。とある小川をさかのぼるうちに足をふみ入れた渓谷と、その先に広がる平野には、以外に豊かな自然があった。生い茂る緑の中にはタバコ・アロエ・サトウキビ・メロン・ブドウなど有用な植物が点在し、さらにはココヤシ・オレンジ・レモン・シトロン・ライムなども見える。「このかぐわしい（delicious）谷間」に降り立っては、さすが散文的なロビンソンも、「ひそかな喜び」を禁じえない。「辺り一帯がみずみずしい緑にむせかえるようで、物皆とこしえの緑と春を謳歌しており、そこはまるで人工の庭

のようだった」(113)。うれたメロンのころがる庭 ── これではまるで、かつてマーヴェルが称えたアプルトン屋敷の庭と同じではないか。おまけに「かぐわしい（delicious)」という語が、ルネサンス以来伝統的に庭に冠せられてきた形容詞にほかならないことを知ってみれば（『楽園と庭』154ページ)、ロビンソン（デフォー）は島の楽園を描写するのに、以外に古いイメージに頼っていることが分かる。

この楽園はしかし、考えてみれば奇妙なものだ。ロビンソンはそれを、単に「庭」と言わず「植樹された（planted）── すなわち、人工の ── 庭」と呼ぶ。庭が人工の産物であるのは自明のことなのに、なぜ改めてそれを断らなくてはならないのか。それともうひとつ気になるのは、タバコ・アロエ・メロン・ブドウなど10種類におよぶ植物名があげられていて、豊饒な楽園のイメージに貢献しているのだが、アメリカを原産地とするのはタバコ、ココヤシそれにブドウ（これにはヨーロッパ種もある）だけで、他の７種類は移植されたのでなければ、ロビンソンの島には存在しえないものであることだ。しかもこれら10種類の植物はすべて、野生種に改良を加えて当時すでに各地で栽培されていたものばかりである。こうした植物名の選択は、デフォーが利用したとされるダンピア以下の航海誌の質ともかかわる問題で、断定はむずかしいが、少なくともロビンソンの島の楽園は、人工への傾斜をその著しい特徴とすることは確かだろう。しかもなおいっそう奇妙なことに、ブドウを干しブドウにして貯えている以外には、ロビンソンが以後この楽園から生活の糧をえた痕跡が、作品の中に見当たらないのである。それもそのはずで、楽園の描写そのものが、妙に消極的なのだ ──「ここにはココヤシ・オレンジ・レモン・シトロンなどの木が沢山あったが、全て野生で、おまけに少なくともその時、実を結んでいるものはほとんどなかった」(114)。だから楽園の発見後もロビンソンは、営々として生活の改良にとりくむ。４年目には大麦を収穫してパンを焼き、11年目にはついにヤギの家畜化に成功して、その乳からバターとチーズを作る。ムギとヤギ ── すなわち農業と牧畜の成果こそ、28年２カ月19日に及ぶ孤島での生活を支える物質的基礎であった。ロビンソンは

楽園というものが本来保証するはずの、採集経済に甘んずることをしなかった。いやむしろ作者が島の楽園に、それを可能にするだけの豊かさを与えなかったと言うべきだろう。いわばロビンソンは、自らの手で楽園を築かねばならなかったのである。生け垣に囲われた城塞と田舎屋敷、そして二つの麦畑と一つの牧場を持ち、それなりに満ち足りた生活の中で、こんな感慨にふけることになる。――「私はもう、島での暮らしにもすっかり慣れてしまった。こうなった以上はあきらめて余生をここで過ごし、この島に骨を埋めても悔いは残らないはずだ」(185)。しかしこの結論には一つの条件がついていた――「もし蛮人の邪魔が入らないということさえ確かなら」。

ロビンソンの楽園を脅かす「蛮人」の影。「蛮人」とはこの場合、コロンブス以来「食人」のイメージによってヨーロッパ人の脳裏に焼きつけられた、カリブ海のインディオのことだが、それが最初に彼の意識をよぎるのは、漂着のおよそ一年後、はじめて島の反対側に探索の足をのばし、島の西方から西南西の方角にかけて陸地を望見した時のことである。その時ロビンソンの頭にひらめいたのは、もし船影を見かければ、それはスペイン領アメリカの一部だが、そうでなければ、それは南のブラジルに至る最悪の蕃地、食人種の住む地方に違いないということだった(122)。以後次第に安定に向かう島の生活の中で、この不安が不気味な通奏低音を奏で続ける。そしてついに漂着後15年目に砂浜での、あの衝撃的な足跡の発見となる。以後ロビンソンと「蛮人」とのかかわりは、食人の跡の発見・食人現場の目撃から、二度にわたる交戦と、フライデー父子およびスペイン人の救出へと展開していき、ロビンソンは楽園の防衛に成功するのだが、その際威力を発揮したのが銃とキリスト教であった。すなわち銃は二度の戦闘で合計19人の「蛮人」を殺し、キリスト教は寝起きを共にすることになった食人種フライデーに、ヨーロッパ的価値観を植えつけて無害化するのに役立ったのである。

洋上楽園の建設と「蛮人」の脅威、そして銃とキリスト教によるその排除――これが『ロビンソン・クルーソー』の基本構造だとすると、それが以後現代まで、多くのヨーロッパ人に思索や創作のモデルを提供してきたのは、デフォー

が期せずして、資本主義から帝国主義に向かうおよそ250年のヨーロッパ史を先取りしていたからにほかならない。ルソーはロビンソンの中に自然人の理想を見、マルクスやヴェーバーは経済人の典型を見た。彼らがそろって見落としたか又は無視したのは、「蛮人」すなわちロビンソンの海の先住者の姿であった。[3] だが一方には、それを見落とすどころか、逆に想像をたくましくして、色鮮やかに塗りあげていった人々がいた。19世紀に花開いた海洋冒険小説の作者とその読者たちである。

3

『ロビンソン・クルーソー』の成功は、発行後10年を経ずして、イギリスの内外を問わず、無数の模倣作品を生みだしていき、やがて「ロビンソン物語（Robinsonnade)」なる一ジャンルを、ヨーロッパ文学の中に形成することになった。だがおそらくその最高傑作は、19世紀半ばに書かれた海洋冒険小説、『さんご島』であろう。（これがいまだによく読まれていることは、ペンギン社のパフィン・ブックスに入っていることからも分かる。）しかし『さんご島』が書かれるためには、二つの前提が必要だった。一つは『ロビンソン・クルーソー』の児童文学化、もう一つは場面の移動（カリブ海から南太平洋へ）である。『ロビンソン』の児童文学化は、1762年、ルソーが『エミール』の中で、これを少年エミールに与えるべき唯一の書物に指定した時、すでにはじまっていたといえるが、それが決定的になるのは19世紀のことで、世紀後半ある男子校で行われた調査では、これと次にとりあげる『スイスのロビンソン一家』が人気番付の一・二位を占めている。[4] 一方カリブ海から南太平洋への場面移動を促したのは、何といっても18世紀後半に行われたクックの航海が、この地域をおおっていたヴェールを次々にはぎ取っていき、新世界発見以来の衝撃をヨーロッパに与えたことだろう。それにこの移動には、何かと好都合な所があった。南太平洋が無人島にこと欠かないのは言うまでもないが、同時にそこは、航海者たちによれば、カリブ海にまさるとも劣らない食人種の海だった。ロビンソンの島をオリノコ河口からポリネシアへ移

すのに、何の障害もなかったのである。

『スイスのロビンソン一家』は、『ロビンソン・クルーソー』から『さんご島』にいたる変化の中間形態を示すと言ってよかろう。「1798年の革命」で財産を失った「西スイスの牧師」がイギリスに亡命、後タヒチ島宣教の任をおび妻子を伴って任地におもむく途中、嵐にあって遭難、ポリネシアの無人島に漂着する。一家はさまざまな困難の後に島を開発して定住、布教と教育につくす。ここにはまず、場面の移動がある。次に作者が自分の子供に語ってきかせたという作品の成立事情からして、児童文学的な性格が強い。唯この小説では、後の海洋冒険小説とは違って、主要人物の中に大人がまじっており、その大人が子供たちのために事件を解釈したり、教訓を与えたりする形をとっている。さらに「楽園と蛮人」というモチーフから見ても、この作品は過渡的な性格を示す。無人島の自然はロビンソンの島より豊かだが、牧師一家はロビンソンを思わせる計画的な労働によって、家屋と二つの農場を含む「居留地（settlement)」を作りあげる。この居留地に「蛮人」が襲来し、妻と末子を連れ去るのだが、実は「蛮人」たちはすでにキリスト教の影響下にあり、人質に危害を加える意図は元来なかったことが、やがて明らかになる。『スイスのロビンソン一家』はこのように、ロビンソンの島より恵まれた楽園とロビンソン的な労働、そしてすでに無害化された「蛮人」を組み合わせた中途半端な小説で、いささか緊張感に欠ける。それを幾分補っているのが、豊富な博物誌的記述である。これは次の『さんご島』にもひきつがれていく特徴だが、違うのは『スイス……』の場合、約60枚ものビュフォン風の挿絵がついていて、それが鍾乳洞発見を描いた一枚をのぞき、全て動物画であることだ。逆に『さんご島』にそえられた八枚の挿絵がペンギンと鍾乳洞をえがいた二枚をのぞいて、全て活劇シーンで占められているのと較べると、これら二つの作品の間に起こった「ロビンソン物語」の質的変化が明らかになるだろう。それはともかく、両者に共通する博物誌への傾斜が、『ロビンソン・クルーソー』以後に始まった「博物誌の世紀」（クックもその一翼をになった）を反映していることは間違いなく、共にクックの名を作中に登場させて

いるのも偶然ではあるまい。

4

13歳から18歳までの三人の少年が乗り組むイギリス船が嵐にあって難破、三人はメラネシア、フィージー諸島近海の無人島に漂着、楽園さながらのさんご島で容易に生活の糧をえつゝ快適な日々を送る。だがその平和もやがて部族対立にからむ食人種の侵入によってかき乱されることになり、さらには語り手のラルフが海賊にさらわれるという椿事まで発生するが、それがかえって幸いし、ラルフは海賊中の良心派とはかって海賊船を奪取、漂流生活に終止符を打つ。その後少年たちは現地の紛争に介入して捕虜になるが、イギリス人宣教師の来訪で村ぐるみの改宗が実現し、少年たちは無事釈放される。

これが『さんご島』のあらすじである。この簡単な要約からも、「ロビンソン物語」の基本構造を読みとることができる。すなわち洋上の楽園と蛮人の侵入、そしてキリスト教による蛮人の無害化である。唯ここには、『ロビンソン・クルーソー』で重要な役割をはたす「労働」のモチーフが欠けている。そのかわり（というより、それとかかわって）他の全てのモチーフが格段に強化される。「楽園」はいっそう豊かで美しく、「蛮人」はいっそう醜く残忍であり、そして布教の効果はいっそうめざましく、輝かしい。

さんご礁にとりまかれた少年たちの島は、「古のパラダイスもかくやと思わせるほどの」(28) 楽園だった。陸地はパンノキ・ココヤシ・ロウソクノキ・タロイモ・ヤムイモ・テツノキなど有用な植物におおわれ、静かな内海にはサンゴをぬって、色とりどりの魚が泳いでいた。蛋白質の補給には太った野豚を即製の槍で突き殺しさえすればよかった。「すごいや、この島は。何もかも料理して置いてくれてるんだから」(38) というのは、パンノキをみつけた時、少年たちの一人が発した歓声だが、ここではパンノキの実が、調理しないでは食べられない事実すら伏せられていて、ミルクが川を作って流れているという、例のコケイン幻想をすら思わせる楽園図が描かれていく。このような環境の中で生きていくには採集経済こそふさわしく、少年たちはありあ

まる余暇をダイビングや水生動物の観察についやす。彼らが作りだすほとんど唯一の道具らしい道具といえばボートだが、それすら彼らにとっては、二隻のカヌーに孤島脱出の執念を注いだロビンソンとは異なり、おおむねスポーツの用具にすぎない。少年たちはまた、住居の建設さえ放棄して岩棚を利用し、それを木々の葉と枝でおおっただけの、「あずまや（bower)」での暮らしに甘んずる。要するに彼らは、非ロビンソン的な生活様式に徹するのである。それだけにこの物語が、次のようなエピソードを含むことは興味深い。ある日島を探索するうち、少年たちは森の中で一軒の朽ちはてた小屋を見つける。ドアをこじ開けて入ってみると、片隅のベッドの上には、折り重なるようにして横たわる人と犬の白骨があった。室内にはほかに鉄鍋・おの・ピストルなどが、ほこりに埋もれていた。この情景を見て少年たちは、流れに橋を渡し、空き地にサトウキビ畑を作ったのもこの人物であったことに思い当たる。それはいわば、さんご島のロビンソンであった。少年たちは柱におのを入れ小屋をこわして、その中に遺体を埋める（76-8)。その時彼らは象徴的に、ロビンソン的生活様式を葬ったのである。

葬れなかったのは食人種たちのおどろおどろしい姿であった。漂流の途中気を失っていた語り手のラルフが、息を吹き返した途端に思い浮かべたのもそれだった――「これまで南海の島々について聞かされてきたことからすると……ぼくらはきっと、生きたままで丸焼きにされてしまうだろう」(20)。不安は以外に早く現実となって、少年たちの前に姿を現す。突然島が部族抗争の戦場になったからである。犠牲者がその場で食べられる。ロビンソンも間近には目撃しなかった食人場面の描写が、異様にどぎつく生々しい――「断末魔のけいれんが止まりきらないうちに、連中はもう死体から肉を薄く切り取り、火で軽くあぶってからむさぼり食らった」(127)。食人は戦闘の際に行われるだけではない。「フィージー諸島の連中は敵だけじゃなく、味方同士でも食べる」(155）のである。食人以外にも「蛮人」たちの残忍さがしつこく描かれていく。手足をしばられた捕虜が、カヌーでひき殺される。頭蓋骨を砕く棍棒の音が、ページのあちこちではじける。これはまさしく現代日本の劇画の

世界である。だが物語の語り手は、それが事実であることをくり返し強調し、「かくも悪魔的な所業を人に思いつかせる罪の恐ろしさ」(174) に戦慄する。むろんこれは性の悪い扇情趣味だが、そこにはひとつの計算が働いている ——「蛮人」の罪が深ければ深いほど、彼らの魂を救うキリスト教の力は偉大である。裏を返せば、「蛮人」の描写が扇情的であるだけ、キリスト教の描写もまた扇情的にならざるをえないということだ。

この作品では最初から、楽園・蛮人・キリスト教という三つのモチーフが、緊密に結びついている。例えば語り手ラルフがかねて聞かされていた「南海の島々」の話というのはこうだ ——「常夏の豊かな美しい島々が何千となくあるのだが……どうしたわけかそこに住んでいるのは血に飢えた蛮人どもだ。もっともイエスの福音が伝えられた所は別だが」(13)。そして食人現場や虐殺場面のどぎつい描写にたえた読者なら、次のような「事実」の不思議さに、話し手同様打たれることだろう ——「この辺りで船が無事に出入りできるのは……福音の入った島だけさ」(151)「考えてみりゃあ不思議だよな、宣教師の居ついたとこじゃあ、こういうことがぱたりとやむんだからな」(164)。

実際少年たちが、奪った海賊船を操って訪れた島でも、捕虜がカヌーに押しつぶされている砂浜の反対側には、現地人の宣教師がすでに入り込んでいて、ささやかながらキリスト教徒の集落ができあがっていた。そこには白亜の教会を中心にヨーロッパ風の家屋が立ち並び、住民は「身を衣服でおおい、いかにも理性的だった」(213)。その清潔な町並みと、未改宗の食人種たちの哀れな草ぶきの集落との間には、信じがたいほどの隔たりがあった。キリスト教化は当然のことながら、ヨーロッパ化をも意味したのである。だが現地人宣教師には、食人種を村ぐるみ改宗させ、捕虜になった少年たちを救う力を与えられてはいない。それを実現するのは、島を偶然訪れたイギリス人宣教師であった。少年たちが縄をとかれて外に出てみると、「蛮人」はすでに蛮人ではなかった。このどんでん返しに、経過の説明は不必要だ。唯デウス・エクス・マーキナ —— 機械仕掛けの神の登場がありさえすればよかった。神の言葉を伝える白人は、また神でもあったのである。

5

1916年にサマセット・モームがタヒチを訪れた時、そこにはすでに「蛮人」の姿はなかった。かわりにいたのは、ヨーロッパ人になりきれない、「遅れた文明人」であった。島がなお楽園でありえたとすれば、それは美しい自然のためだけではなく、そこをヨーロッパの対極に位置づけることができたからにほかならない。言いかえれば洋上の楽園は、機械化されたヨーロッパの管理社会を地獄とみなす視点の成立によって、新たな生命をえたのである。（パラダイスのパラダイムの組みかえ。）この楽園を脅かすのは、もはや「蛮人」ではありえなかった。それは例えばゴーギャン晩年の苦闘が示すように、現地人に無理解な植民地官僚であった。

『月と六ペンス』のストリックランドは、どの程度ゴーギャンなのか。「これは完全な創作で、ゴーギャンと大して関係はない。小説としてはうまいが、ゴーギャンにとっては迷惑な話であろう」[6] と、福永武彦はにべもないが、実は両者は細部のあれこれではなく本質的な意味で、密接につながっているのではないか。第一に、モームの主人公もゴーギャンも、「土着化（going native）」――つまり現地妻をめとり子をもうけ、時にはヨーロッパの衣服すら捨てるという、植民地在住のヨーロッパ人がもっとも忌み嫌った生活様式を実践していること。第二に、モームにせよゴーギャンにせよ、タヒチの現実を想像力によって加工することなしに、楽園図を描くことはもはやできなかったこと。たゞ違うのはその場合、ゴーギャンが現地の古代信仰にさかのぼり、そこにタヒチの失われた楽園を求めたのに対し、モームは逆に、キリスト教的な楽園をタヒチの現実に接ぎ木しようとしたことだろう。福永武彦はタヒチ移住後のゴーギャンを、まずはヨーロッパ人の目で、次にタヒチ人の目で、そして最後に両者をこえた普通的な位置からタヒチを見たと語っている（『ゴーギャンの世界』）が、モームはこの第一段階にとどまったと言わねばならない。ゴーギャンは、その遺言的な大作、『我々はどこからきたか、我々とは何か、我々はどこへ行くか』の中で、マオリ神話によりつつも、独自の神話的宇宙観を描いた。[7] 一方モームのストリックランドが、人里はなれた「エデンの園」

(191) に住み、ライ病に冒されながら死の直前に完成させたのは、アダムとイヴの住むキリスト教的始原の世界、「エデンの園」(209) の楽園図であった。

だが私の主題からすると、むしろ重要なのはモームとゴーギャンの差異ではなく、その同一性である。南海の島々が楽園であることをやめた時、それを脅かす「蛮人」もまた姿を消していた。モームのストリックランドは、タヒチ娘のアタにかしずかれながら (193)、その生涯を終える。そしてアタは、ストリックランドの遺言通りに、エデンの園を壁に描いた小屋を焼き払ってしまう。楽園はおろか、楽園図すら存在しえない時代がきたのかもしれない。モームのいわゆる「南海もの」は、楽園図というには余りにもさめたアイロニーにみちみちている。

6

『蠅の王』の中で、「蛮人」は復活する。こう言うと、逆説的にきこえるかもしれない。『蠅の王』に「蛮人」が登場するわけではないし、何よりもこの作品は、従来「蛮人」として外在化されてきた悪を、少年たちの中に内在させたことをもって評価されてきたからである。南海のさんご島に不時着したイギリス少年の一団が、理性派と本能派に分裂して対立、二人が殺され、三人目が殺される寸前に、イギリス海軍によって救出される。この残酷な楽園喪失の物語が、『さんご島』の福音派的な楽天主義に対する痛烈な反論であることは明らかで、そこにカトリック風の原罪観を読みとるかどうかは別として、[8] それが極限状況におかれた子供の集団について、ひとつの恐ろしい真実を語っていることは間違いない。だが一体『蠅の王』に、「楽園と蛮人」というパラダイムを適用することはできるのだろうか。

ゴールディングの島も、まずは楽園の条件をそなえている。このさんご島もまた美しい。「砂浜にはヤシの木が翼を広げ」「不規則な弧を描く環礁の内側は、まるで山の湖のように静かで、あらゆる色調の青と、暗い緑と紫に彩られていた」(10)。丘の中腹には青い花が咲き乱れ、「辺りは飛び立ち、羽ばたき、花にとまるチョウの群れで息苦しいほどだった」(30)。島は食料にも

こと欠かない。ココヤシをはじめとする果実がいたる所に実っているし、野豚もいる。だが『蠅の王』の楽園描写には、きわだった特徴が二つある。ひとつは、『さんご島』やその先行作品には必ず見られた博物誌的なディテールが、『蠅の王』にはほゞ完全に欠けていることだ。例えばここにはココヤシ以外に、熱帯特有の動植物名は登場しない。また『さんご島』の三少年が照明に利用したロウソクノキも、ここではその博物誌的意義を失って、単に美しい木の芽の比喩になってしまう ――「まるでロウソクだ。ロウソクの林だ。ロウソクの芽だ」(32)。

『蠅の王』の楽園のもうひとつの特徴は、そこで暮らす人間の生理にはじめて視線が向けられている所にある。この島でも子供たちは、全面的に採集経済に依存することになるのだが、考えてみるとそれは、次のような生理作用を伴うはずではないか ――「〔小さな子供たちは〕ほとんど一日中果物を、熟したのも熟さないのも、手あたりしだいに食べるものだから、腹痛と慢性の下痢を起こしていて、今ではそれにもなれっこになっていた」(64)。これは「文明人」が採集経済に移行した場合の、いわば生理的帰結であって、それにあえてふれた所に、『さんご島』を裏返しにしようとするゴールディングの、意地の悪い眼差しを感じとることができる。

このようにみてくると、『蠅の王』の島が、一見楽園の条件をそなえながらも、自然描写の抽象性と生理描写の具体性が背中合わせになった、いささか奇妙なものであることが分かる。これはもちろん、楽園そのものに対するゴールディングの姿勢を暗示する事実だが、それにしてもこの疑似楽園にも、ホラガイが発言権を全員に保証するという、一種の民主社会が成立する可能性はあった。それがあえなく崩れ去ったのはなぜか。楽園を脅かした者は一体誰だったのか。

それは子供たち自身だったと一応は言える。具体的にはジャックのひきいる本能派が理性派を圧倒し、島を暴力で支配した事実をさす。人間性の根底にこのような「蛮性 (savagery)」がひそむというゴールディングのペシミスティックな人間観をそこに認めるのが、常識的な読み方だろう（例えば『オッ

クスフォード版イギリス文学辞典』)。だが「蛮性」という言葉そのものがはらむ問題性を今は問わないとしても、この作品はけっして、そうした抽象的な解釈ですませることのできるものではない。なぜなら少年たちの「蛮性」がひきだされるためには、彼らはまず具体的に「蛮人」になる必要があったからだ。「蛮人」化の方法は、主として身体彩色と踊りである。狩りの際のカムフラージュとして、顔に赤・白・黒の三色を粘土と炭でぬりつけてみたジャックは、それが異様な解放感をもたらすことに気づく(69)。後にこの心理効果を利用してジャック一派は全身に彩色を施し、理性派のキャンプを急襲して火種を奪う。踊りも最初は遊びとして、ロバートを野豚に見たてジャックの先導で始まるが(126)、「奴を殺せ、のどを切れ、血を流せ」というかけ声と共に踊られるこの狩りの踊りは、次第に凶暴の度をましていき、たまたま森からさまよい出たサイモンを取り囲んで、手製の槍で突き殺してしまうのである(167-9)。こうして少年たちは、彩色と踊りによって変身をとげ、ジャックを「酋長」と仰ぎ岩山と洞穴を根拠地とする「蛮人」の「部族」になりはてる(176-7)。(作品のこの部分では、彼らは終始「蛮人」とよばれている。)彼らは基地に近づく理性派の一人に岩を落として殺し、ジャングルに火をかけて最後の一人を砂浜に追いつめる。それができたのは、彼らがもはやイギリス少年ではなく、「蛮人」であったからだ。ボートから降り立った海軍士官は、そのことに気づいていない ——「お前たち、イギリスの子供なんだろ。じゃあもう少しうまくやれたはずじゃないか……『さんご島』みたいにさ」(222-3)。むろん作者のメッセージはこうだ ——『さんご島』とは違って、子供は「蛮人」でありうる。

これを児童論的に評価することはたやすい。『蠅の王』が子供について、ひとつの恐ろしい真実を語っていることは疑いない。だがそれにしても、なぜ「蛮人」なのか。なぜ子供たちは、残忍な本能に身をゆだねる前に、まず「蛮人」に自らを擬する必要があるのか。これは単に子供の遊戯性をもちだして片づく問題ではない。なぜなら身体彩色にせよ狩りや戦闘の踊りにせよ、いずれも『さんご島』を含むヨーロッパのテクストが、幾世紀にもわたってス

テロタイプ化してきた、「蛮人」すなわち非ヨーロッパ人の属性の一部をなすものだからである。その属性を身につけた時悪が始まるというのなら、ある種の非ヨーロッパ人は悪の権化ということになりかねない。そしてそれこそは、『さんご島』をはじめとする海洋冒険小説が伝統的に依存してきた「蛮人」の原像であった。『さんご島』を裏返しにするというゴールディングの意図は、この一点において裏切られている。楽園のパラダイムから「蛮人」は消えた。だが「蛮人」のイメージは残ったのである。

（注）

1） もっとも川崎氏はこの直前に書かれた『庭のイングランド』（名古屋大学出版会、1983）の中では、私が後にとりあげるような意味で、『ロビンソン』に軽くあふれている（220ページ）。

2） 私が用いたクストは次の通り。

Daniel Defoe (ed. Angus Ross), *The Life and Adventures of Robinson Crusoe* (Hammondsworth, 1970)

J. R. Wyss, *Swiss Family Robinson* (New York, n. d.)

R. M. Ballantyne, *The Coral Island* (London, n.d.)

W. Somerset Maugham, *The Moon and Sixpence* (Hammondsworth, 1983)

William Golding, *Lord of the Flies* (London, 1967)

なお引用の末尾に付された数字は、ページ数を表す。

3） ルソーについては、Martin Green, ‘The Robinson Crusoe Story’, in Jeffrey Richards (ed.), *Imperialism and Juvenile Literature* (Manchester, 1989), pp. 37-8.

4） ‘Introduction’, ibid., p. 8.

5） Green, p. 42.

6） 福永武彦『ゴーギャンの世界』（新潮社、1965）XLII。

7） 同255ページ。

8） Green, p. 50.